

大陸（南支）

仏印進駐前の南支軍

賓陽・広九作戦

大阪府 岩屋 明治

広東省北部にあったわが第十二師団は、攻勢に転じ従化付近に進出、約四千の敵に大打撃を与えていました。さらに南下してきた敵を撃破しましたが、一部は山中にあり遊撃戦を続けていました。その後翁英作戦を発起したのであります。これは翁源、英徳にある敵を捕捉殲滅し、蒋介石軍を瓦解させる目的でありました。

我々輜重兵第十二連隊も出動し、昭和十四年十月十

七日、鐘落潭を出発して北へ進む駄馬編成であります。

神岡、従代を通過して右へ方向を変えて山岳地帯に入ります。道なき山を越え、谷を越え溪谷の岩や石ころばかりで、一人ぐらいがせいぜい通れる細道を渡ったり、登ったり、しかも暗夜の行軍です。携帯灯を灯せば敵の攻撃を受けて、馬は崖から落ちたり、流されたりして難所を越えながらの夜明けです。

第十七班長の浜田上等兵の内地送還により進級した伊藤上等兵を班長代理にしました。

一息つく間もなく、大難関の牛頭嶺山の山越えであります。この山は二三〇〇メートルぐらいのはげ山で木がほとんどなく、峠の道幅が狭くて、兵一人通るのが精一杯。馬は荷が多くなかなか前進できません。三時間も待ちくたびれて、夜が明け、ようやく牛頭嶺の

峠をくだることができました。峠下の集結地に到着し、夕方六時ごろ中隊は前線部隊追及のための夜行軍です。やっとのことで呂田に到着して野営です。呂田には川が流れて、川全体に温泉が湧いており、久しぶりに戦塵を洗い落としました。

翌朝、梅杭県を目指しての行軍ですが、敵が破壊した橋を越えて夕方薄暮のころ梅杭県城に入城しました。ここで待機して命令あるまで宿営です。今日は昭和十四年十二月三十一日の大晦日で、故国の正月を偲んで、餅米探しに懸命でした。我が第三小隊第七分隊は餅米が徴発でき、第三小隊全体も無事正月の餅にありつくことができました。

二回目の餅がつき上がったころ、前線の状況が一変して、三十分以内に出発行軍すべしとの命令です。急いで、できた餅は馬糧袋や水囊や鞍囊に詰め込んで出発準備完了。

故郷を離れて三年目の正月は、おこわを頬張りながらの出発です。朝日が差すころ軍公路に出ました。後方に山砲があつて前進中です。ところが、午後二時ご

ろ広東集結、転進の命令が入りました。今度は広東を目指しての急行軍です。昭和十五年一月二十一日、広東集結完了。この間五百キロくらいの行程を踏破しています。

二十二日、弾薬、糧秣、被服受領。馬具の手入れ、蹄鉄取り換え、その他を二日間であらわして、各部隊は駄馬編成で珠江下流の黄浦港より乗船して広西省の都南寧欽県への出港です。

我が中隊は黄浦港より上陸用舟艇で欽江入口の欽県へ上陸し、一路南寧目指しての急行軍です。欽県を出発して三時間ぐらいで丘陵の草原地帯に出ました。その途端に風と砂塵で目も口も開けることもできません。タオルで顔半分被覆しましたが、兵や馬のまつ毛や鼻口は砂塵で真っ黄色です。口の中は砂でじゃりじゃりするし、自動車が通過したら、それこそ呼吸もできないくらいです。

途中の峠で輜重の自動車隊の車輛十五台が敵敗残兵の襲撃で無残にも焼かれた残骸がありました。中隊は、広西省の都、南寧の手前、橋の下に夜の九時ごろ到着

しました。南寧の手前二十五キロぐらゐに三叉路があつて仏領印度支那一柳州に通ずる道路があります。この三叉路の周辺の草原の中央部に高さ五メートルぐらゐから七十メートルぐらゐと思われる奇岩が周囲五十メートルにわたりそそりたつております。この岩山がいろいろな形態に見えるので、いつまで眺めても恐らく飽きることはないでしょう。この景色こそ美観であり奇観であり、筆舌で表現できない絶景でありました。それは中国の墨絵、南画にある風景そのものです。

待機すること二時間半あまり、永淳、古城、賓陽に向かう戦鬪追撃で、各部隊は一月二十八日、西江河畔堤防上を行軍しました。中隊も夜中一時半ごろより出発、行軍開始、まもなく暗闇のなかを黙々と夜行軍です。横には五十メートル間隔に十メートルぐらゐの戦車壕の連続です。四キロ（一里）進むのに三時間を要しましたが中国軍の防備がいかに周到に行われたかを物語っています。

次の渡河地点、永淳に到着したのは正午ごろで、夜が明けてから対岸の土手を見れば無数の避難壕があり

ました。こちらの堤防の下には三十メートル間隔で上民の食糧や布団、毛布などがあり、住居壕がざつと四五十個ぐらゐありましたが、人影は見えませんでした。

部隊は山田丁兵隊が架橋した軍橋を渡河して、賓陽方面へ大迂回作戦に急行軍の三日間の連続です。昼夜兼行のため兵も軍馬も疲れきっていますが、各部隊とも頑張つておりました。三日早朝、賓陽の大草原に到着し、早速、糧秣、弾薬の補給をしました。重機関銃、迫撃砲、山砲、平射砲の一斉攻撃のため砲弾の音は朝の静寂を破つて響き渡りました。戦鬪はますます激しさを増し、四時間ほど続き、輜重隊も補給の任務を終えて後方待機となりました。

さしもの頑強に抵抗した敵軍団もわが軍が突破口を開いた方へ雪崩を打つて敗走しました。戦車隊、騎兵隊はこれを追撃します。狼狽した敵は多数の死体を残して上林方面へ敗走しました。この戦鬪で敵の死傷者は二万五千人と推定されました。激しかった賓陽大作戦で多大の戦果を納めて、南寧に向かって引き揚げのため行動を開始しました。

兵力は日本軍が三個師団、約六万人、敵側は十個師団約十万人と聞いております。この作戦に台湾軍の混成旅団桜田兵団桜田中将閣下指揮で南寧を掃討して北上し、一唐、二唐、三唐、四唐、五唐、六唐、七唐、八唐、九唐と占領して、賓陽大平原に進出してきました。これによりわが第十八師団が賓陽大作戦に多大の効果を与えたことは、この作戦の意味深さ、いかに大事な作戦であったかがわかるような気がします。

一海南島掃討作戦は、歩兵二個連隊と山砲一個中隊、迫撃砲一個中隊、工兵が一個中隊、騎兵一個中隊、わが輜重兵連隊からは第一中隊だけが参加しました。欽県から海南島海口付近集結です。

欽県の欽江から上陸用舟艇に乗船、海口砲台付近に無血上陸して、海口を既に占領していた海軍陸戦隊司令部と連絡を取りながら一番先に瓊州県城を占領しました。三月一日から八日までは海南島北部地区掃討第一期作戦参加です。引き続き九日より三月二十日まで、海南島北部地区第二期掃討作戦に参加しました。

海南島は内地の四国と同じくらいの面積ですが、海

岸線には熱帯植物が生い茂る以外は、カルスト（石灰岩の）台地が多く、山口県の秋吉周辺の地形と似通っています。山中に入れば熱帯植物ばかりで、水が少ないので、飯盒炊きにするのに困り果てました。そのため椰子の実を割って、その水で飯を炊きました。島には大きなヒヒが棲息して、馬が襲われたのには困りました。この動物はサル科の哺乳類で、口先が突出し、先端に鼻孔があって、四肢で歩き、凄く凶暴性があるのです。

南方はどこでも暑いのですが、海南島には毎日三回ぐらいスコールがあるのでさほど暑くありませんでした。

三月二十一日、海口集結です。四月四日、広東、東山地区に帰營して、五日より広東地区の警備と輸送の任務に就きました。六月二十三日、東山地区出発、広九鉄道線路沿いに南下して石龍、石灘で各部隊と合流して広九作戦行動の開始です。

まず東莞を占領して大朗墟、田心を攻略し、他の一部隊は錦厦を激戦の末占領しました。中隊は南下する

歩兵部隊を追及、樟木頭を過ぎ、右石坪を過ぎました。敵は次から次から橋梁を爆破しましたので渡河に手間取り、何日も難渋な行軍を続けなければなりません。暑さは四十五度ぐらいいあるので汗は出るし喉はからからです。やっとのことで平らな道に辿り着きました。西側には果樹園がありました。

昭和十五年六月、陸軍曹長に任官、第一中隊本部付を命ぜられました。今日まで世話になった第三小隊全員に感謝して、本部では馬匹の専門係になりました。

本部には獣医室、医務室、経理があります。私は馬係専門ですから作戦の折は獣医室と行動を共にしておりました。両側の畑にはライチ、龍眼などの果物で甘い酸っぱい香りが漂っています。一枝折って戦友と分け合いながらの行軍で、水分が多く、とろりとしたその味は格別で、生き返ったようになりました。

宝安县の市街が見えてきました。敵の拠点も間近です。宝安县城一番乗りは竹下部隊（小倉編成）で、城頭高く日章旗が翻っております。宝安の南頭市に宿営翌日深圳国境へ前進です。そこは九龍半島から流れて

きて川幅は三十メートルぐらいの川で、広九鉄道の終点です。川のこちら側には日本兵の歩哨が立っており、向こう側には英国の歩哨が立っていて、英国の歩哨が英国製の煙草を袋に入れて投げてくれました。こちらからは「サンキュー」といって言葉を交わします。

第三中隊の伊藤隊は九龍半島の国境最南端の沙頭角の警備についています。第一中隊は深圳国境を引き上げて、鉄道にて東山地区に集結帰営しました。

昭和十五年九月十三日、勅令により兵科は無くなり、陸軍上等兵と改称され、十月二十五日、内地帰還の命令が出ました。広東出発の日は分かりませんが、内地に帰ることは間違いありません。その日のくるのが待ち遠しかったものです。

二週間で私物検査が始まり、数回の繰り返しです。十一月八日がいよいよ出発、そして黄浦港までは自動車中隊の車輛で行き、広場で憲兵立ち会いの私物検査が行われ、十二時ごろ終了して午後二時乗船開始でした。

多くの帰還兵で乗船も時間を要し、夕方の五時に出

港。数々の戦闘と苦勞の思い出を残して、大陸を離れ、十一月九日門司港上陸。直ちに第十八連隊の原隊復帰し、同日平川隊へ編入となり、十一月二十日、召集解除となりました。

懐かしの大阪の我が家に帰宅しました。翌日兄の家へ行き、仏壇に合掌して、任務を無事果たして帰ることのできた次第を報告し、母や家族皆が涙を流して喜んでくれました。突然の召集解除で、連絡なしでしたので驚いたのも無理ありません。翌日、早速親類や友人、知人宅を訪れて、お礼や報告を申し述べ、挨拶まわりをすませ、その後は兄の商売の手伝いをしました。

昭和十六年の正月を迎えました。三年半越しの正月で、物資不足の折ですが雑煮を頂いて内地の正月を迎えることができました。正月五日を過ぎたころ、町内会の副会長さんの勧めで兵庫県加東郡福田村出身の女性と見合いをしました。そして二月二日、形ばかりの結婚式を挙げたのです。新婚生活は五カ月、大阪の天神祭も間近になった七月十五日、突然臨時召集が下り、久留米工兵第五十六連隊に召集になりました。

満州編成の独立電信第八十一中隊に編入。この中隊は有線二個小隊、無線一個小隊、器材小隊一個小隊、中隊長は古賀中尉、器材小隊長草野中尉で、私は草野中尉の副官になりました。器材小隊の編成は一分隊は笠伍長、二分隊は中山兵長、三分隊は私の戦友の岩丸伍長でした。この召集は関東軍特殊演習（関東特演）ですが、本質的には南方作戦準備要員だったそうです。

八月十三日、原隊出発、久留米駅より臨時列車にて正午ごろ門司駅到着。市内に一泊して、十四日朝七時ごろから船積みして、夕方には門司港を出帆して満州の大連港に向かいました。十七日大連港上陸、市内精華女学校に一泊し、十八日は旅順要塞を見学。二十日大連より軍用列車にて林口、一面坡、判利、開拓団村の千振弥栄村等の駅を通過して、二十二日佳木斯駅に到着し、佳木斯医科大学の丘の記念塔の仮設兵舎に到着駐屯しました。

ここは姫路第十師団の現役兵の警備地域です。中隊も警備につき、北東興山鎮、鶴岡炭坑方面に一個小隊で勤務につきました。ここを流れている川は黒龍江の

支流で松花江といひます。十一月末には川は氷結して自動車、戦車なども氷が厚く二メートルぐらい張りますので、平気で通過できます。昭和十七年二月二十三日、佳木斯を出発、奉天（現在の瀋陽）に二十五日到着。部隊の編成替えが行われ、電信第八連隊ができたのです。私は連隊本部付を命ぜられました。

八月十三日奉天出發、黒河省孫吳県孫呉到着、その後同地にて国境警備に就きました。中隊長は多田中尉が着任。器材小隊は草野中尉が内地帰還となり、代わりに見習士官と交替しました。

昭和十九年二月十五日、電信第八連隊を除隊、原隊の電信第二連隊に転属を命ぜられ、神奈川県相模原第一連隊の原隊に帰隊し、三月十日付をもって陸軍准尉に任官し、同日召集解除となりました。

【解説】

① 資陽作戦

軍は、昭和十四年十二月中旬より「広東北方ニ蠢動スル余漢謀指揮ノ広東軍主力ヲ翁源以南地区ニ捕捉壊

滅的打撃ヲ与エ一挙ニ敵軍ヲ瓦解ニ導ク」ための翁源作戦を開始、第十八、第一〇四師団、近衛旅団を以て十二月二十九日翁源、三十日英徳を占領し、第四戦区长官部所在地韶関五〇キロまで迫り、反転した。（敵交戦兵力約十二万、遺棄死体一万六千、捕虜、捕獲兵器等多数）

反転理由

軍は十二月末ごろから「南寧付近ノ蟬集スル敵ヲ撃滅」する（第五師団の南寧攻略戦の犠牲大であり、中国軍の本格的な大攻勢あり）作戦を決定し、翁英作戦から帰還する軍主力を逐次転用する計画を進めていた。

これに対し南寧奪還を重視する蒋介石は中央軍第一九〇師団を追加投入し、賓陽北方五〇キロの遷江（第十六軍集団司令部）にて、自ら作戦指導をしていた。

一月一日、反転開始した軍主力は、海路欽県に輸送され、兵站自動車隊も不眠不休で一月二十七日予定補給量を南寧に集積した。二十二日近衛旅団は七塘付近第十八師団も南寧南側に集結。

安藤軍司令官は、決戦時期を一月下旬、主決戦方面

を賓陽南方地区とする「会戦指導方策」を策定した。これに対し蔣軍は南寧作戦の戦勝を喧伝し攻撃の意志強く、三万の大軍が大縦隊で南下、これを我が独立第二十一飛行隊が全力を以て攻撃、その前進阻止に努めた。

軍司令官は「本作戦ノ成否ハ一ニ懸カリテ明一日ノ決戦ニ存ス将兵ソレ力戦奮闘以テ必勝ヲ期スベシ」と各兵団に激励打電した。中華民国の国防部史政処の編纂「中国戦争史略」は『我が第三十八集團軍司令官は賓陽において爆撃され、各部隊の連絡は中断し独立の作戦状態を形成す』と、我が飛行第九十戦隊（軽爆隊）の賓陽爆撃が敵指揮組織を壊滅させる重大な戦禍を挙げたと記している。

また、第二十一独立飛行隊は重慶軍二五二師団の退路を遮断した。指揮混乱の重慶軍の一部は一月二日朝退却を開始し、地上よりは第十八（久野）第五（今村）近衛（桜田）各兵団が敵を随所に撃破大打撃を与え、賓陽陥落、崑崙関も回復。第四十四軍主力は賓陽付近に集結、軍司令官は入城した。

同日午後八時、安藤軍司令官は各兵団に対し「賓陽会戦ヲ終結シ南寧付近ニ兵力ヲ集結スベシ」と下令した。

戦果と我が損害（一月二十七日～二月六日）は左記のごとく報告されている。

遺棄死体 二七、〇四一

捕虜 一、一六七

主な鹵獲品 戦車 一九 軽装甲車 五

自動車 三〇 野山砲 二〇

速射砲 一三 迫撃砲 四一

重機関銃 六八 軽機関銃 二四八

小銃 五、七三五

我が損害

戦死 二九五 戦傷 一、三〇七

しかし、半径十五キロのわが包囲圏内に在った重慶軍は総数二五二師、当然わが包囲圏内になお多数の重慶軍が残存していた。したがって、爾後、塩田兵団、坂田部隊は武鳴平野に出撃掃討し、また靈山に在った第六十四軍が永淳方向から我が軍の後を追って北上し

てきて、二月七日、第十八師団がこれを迎撃する事態も起きたという。

② 本作戦後の状況

蔣介石委員長の日本軍に対する觀察

A 日本軍の戦術の長所

- 1 「快」備えなきを攻め、その不意をつく。
- 2 「硬」陣地を死守し、堅強にして抜けず。
- 3 「鋭」錐の如く突進し、勇猛邁進す。

B 日本軍の弱点

- 1 「小」ただ小兵力を以て攪乱し得るのみ。
- 2 「短」ただ短時間の戦闘をなし得るのみ。
- 3 「浅」ただ三百キロ以内の進攻をなし得るのみ。

4 「虚」予備兵力なく、敵後方は空虚なり。
我が軍（第二十二軍）新配備に対する攻撃

A 二月中旬、早くも重慶軍は南下し始め、爾後我が兵站線に対する妨害など、迎撃戦を活発に展開した

B 我が軍の掃討作戦

1 第一次西路作戦（自二月二十一日～二十五日、第十八師団）

2 江北作戦（自二月二十三日～二十五日、第五師団一部）

3 東路作戦（自三月十三日～二十六日、台湾混成旅団、第五師団各一部）

台湾混成旅団、第五師団各一部

4 第二次西路作戦（自三月二十六日～四月上旬、近衛混成旅団主力、第五師団一部）

③ 東支方面軍の広九作戦発動

方面軍は昭和十五年六月二十二日、原支隊を宝安南方に奇襲上陸させ、一部の中国軍を撃破し、六月三十日深圳を攻略した。爾後、同支隊は、深圳、宝安、沙頭角等の国境要地に在って英支国境を完全に封鎖した。

七月二十五日、大陸令第四四〇号を以て、第一砲兵隊編成、重砲兵第一連隊、独立重砲兵二個大隊、砲兵情報第五連隊、第三牽引自動車隊で、独自の砲兵隊は我が軍最初。

同隊は八月十日内地港灣発、八月十八日九龍近くの

大産湾宝安地区に上陸。これは対英戦準備もあるが、香港に脅威を与え、対英政策を有利にしようという威嚇的狙いも充分にあったという。

④ 体験記執筆者岩屋氏が内地帰還後、南支方面の状況も、支那派遣軍の状況も変化している。

昭和十五年三月九日、南支軍隷下第一〇六師団の内地帰還が発令。

同年八月三日、第五師団は仏印国境北部で待機指示。

九月五日、大本営南支方面軍に北部仏印進駐発令。

九月二十三日、第五師団北部仏印ランソン攻略。

九月二十六日、西村兵団北部仏印海防地区に強行上陸。

十月二十二日、近衛師団、汕頭集結。第十八師団広

東集結。第四十八師団海南島集結発令。

⑤ 支那派遣総軍、南支方面軍状況

大本営は七月二十四日、大陸令第四三九号を以て支

那派遣総軍に対し次の如き命令を下した。

一 大本営ハ支那事変ノ迅速ナル処理ヲ企図ス。之ガ為敵継戦企図ノ破摧ニ勉ルト共ニ情勢ノ変化ニ応ズル第三国戦備ヲ補給ス。

二 支那派遣軍総司令官ハ左記ニ準ジ敵継戦企図ノ破摧衰亡ニ任ズベシ。

(1) (7) 略

三 南支派遣軍曹司令官ハ左記ニ準ジ敵継戦企図ノ破摧衰亡ニ任ズベシ。

(1) 広東付近、汕頭付近及北部海南島ノ各要地並南寧ノ龍州道ニ沿ウ地域ヲ占領シ、海軍ト協同シテ敵ノ補給連絡路ヲ遮断ス。広東付近ノ作戦地域ハ概ネ惠州・從化・清江・北江及三水ヨリ下流ノ西江ノ間トス。

(2) (5) 略

これにより南支派遣軍の作戦範囲は制約されたが、大本営は変転極まりなき現下国際情勢に照らし政戦両略の調整を図り、変化に応ずる第三国戦備を補給していたという。(北部仏印戦・援蒋ルート遮断・対香港戦配備等)